

能力があるのに勝てないわけ

わたしは小学生のころ、徒競走に出て、いちども入賞したことはありません。一年生のときから、小学校を卒業するまで、毎年、出場しているのですが、五、六人ぐらいで走って、三等までにはいることが、どうしてもできませんでした。

しかし、それは、いまにして思えば、わたしの実力がそうさせたのではなくて、「自分はだめなんだ。自分なんかに入賞できるはずはないのだ」という気持ちがあって、人とはりあって駆ける、力を出しきって駆けることをしなかったためだと思っています。

なぜかといいますと、中学にはいると、最初の運動会で、どうしたとか一着になり、それが機会で自信がつくと、たちまちクラス代表の選手になり、しまいには、学校代表の選手にまでなったのですから…
…。

つまり、わたしが、小学生のとき、いちども入賞できなかったのは、わたしの足がほんとうにおそいためではなくて、「自分はおそいのだ」

という気持ちが、わたしの足を実際におそくさせていた、ということになるのです。

むずかしいと思う気持ちが漢字をむずかしくしている

おそいと思う気持ちが、足をおそくするように、むずかしいと思う気持は、やさしいことをも、むずかしいものに思いこませるものです。

いままで考えてきましたように、漢字には、むずかしいと思われやすい点がいくつかあります。「漢字は覚えにくい」「漢字は字数が多すぎる」「漢字は字形が複雑だ」これらの見方は、先に述べたように、すべて皮相の見方であり、まちがっていますが、よほど深く考えないと、迷わされてしまいます。そして、「漢字はむずかしい」と信じこんでしまいます。

さあ、そうならたいへんです。どんなにやさしい漢字だって、むずかしく思えてきます。